

エミリ・ディキンソンと日本の花 (3)

鵜野 ひろ子

Emily Dickinson and Japanese Flowers (3)

UNO Hiroko

要 旨

拙論「エミリー・ディキンソンと日本の花」(2-1)、(2-2)、及び(2-3)において、彼女の標本帳にある植物と日本遠征隊が採取した植物の内、15種が共通であることから、それらの植物について検討した。その結果、父親のエドワード・ディキンソンが、国会議員やアメリカンボードの名誉会員としての立場を使って、遠征隊が持ち帰った植物の一部を、押し花であれ生きたままであれ、娘の為に手に入れたと推測した。それ以外に、当時彼女が手に入れる手段はなかったと思われる植物が幾つもある。

本論文では、ペリーの遠征は日本を開国させるという外交目的であったにも拘わらず、何故彼が乗組員に植物等の標本採取をさせたのか、またマカオに駐在していたアメリカンボードの宣教師サミュエル・ウィリアムズが何故、遠征隊に参加し、通訳であるにも拘わらず熱心に植物採取や分類を手伝ったのかについて検討した。

ウィリアムズに植物採集の楽しさを教えたエイモス・イートンは、イエール大学のベンジャミン・シリマンの弟子であったが、フィールドワークを取り入れた独自の実践的科学教育法を広め、エイザ・グレイやエドワード・ヒッチコックに影響を与え、多くの科学教育者を育てた。一方、同じくシリマンに師事したジョサイア・ホルブルックが提唱したライシウム啓蒙活動のお陰で、南北戦争前のニューイングランドで一般人を対象にした講演会が活発に開催され、一般の人々の間でもフィールドワークや標本帳作成が広まった。その結果、海軍ライシウムで活躍し、標本を博物館に提供したペリーのように、科学に間接的に貢献する人々が現れた。そのようなアマチュア科学者の最良の例がペリー提督であり、ウィリアムズ牧師で、二人は図らずも日本遠征で出会い、彼らの採取した植物の一部が同じくアマチュア植物学者のディキンソンに届けられることになったと言えるのである。

キーワード：エミリー・ディキンソン、ペリー提督、サミュエル・ウィリアムズ、
エイモス・イートン、ジョサイア・ホルブルック

Summary

In my previous papers "Emily Dickinson and Japanese Flowers" (2-1), (2-2), and (2-3) I examined the 15 species common to the species in Emily Dickinson's herbarium and the plants collected during the Japan Expedition (1853-54). I concluded that her father Edward Dickinson, using his position as a Congressman and his connection with the missionary organization the American Board, must have obtained various specimens, either alive or dried, from the Expedition for his daughter. There are some she could not have otherwise obtained.

In this paper I research the reasons Perry ordered his men to collect specimens during the Expedition despite its diplomatic purpose to open the secluded country. I also examine why Samuel Williams, who was stationed in Macao as an American Board missionary, joined the expedition as Perry's interpreter and eagerly collected and classified specimens for him.

It turns out that Benjamin Silliman's student, Amos Eaton, under whom Samuel Williams studied at the Rensselaer School (later Polytechnic Institute), developed his own teaching methods for natural sciences that included field trips and making herbaria. He influenced scientists, such as Asa Gray and Edward Hitchcock, and taught many science instructors. Meanwhile, another of Silliman's students, Josiah Holbrook conceived and advocated the Lyceum movement, through which scientific lectures were given to ordinary people in the antebellum New England. As a result, many amateur scientists enjoyed collecting specimens and producing herbaria, and some even contributed to the development of the sciences, like Perry, who worked for the U. S. Naval Lyceum, and provided specimens for museums. It is possible to say that the best examples of amateur scientists influenced by Eaton and Holbrook were Perry and Williams, some of whose specimens must have been sent to another amateur botanist Emily Dickinson.

Keywords: Emily Dickinson, Commodore Perry, Samuel Williams, Amos Eaton, Josiah Holbrook

拙論「エミリ・ディキンソンと日本の花」(2-1)、(2-2)、(2-3)において、ディキンソンの作成した植物標本帳にある植物とペリーの日本遠征隊(1853-1854)が採取した植物の内、15種が共通であることから、彼女が日本遠征隊の植物を分けてもらった可能性について検討した。その結果、父親のエドワード・ディキンソン(Edward Dickinson)が日本遠征を推進していた国務長官ダニエル・ウェブスター(Daniel Webster)を応援し、日本遠征当時、国会議員として詳細な情報を得ていたはずであること、遠征が終了し日本から米国大統領等への贈り物や収集した植物等がワシントンに到着した直後の1855年2月半ばに、詩人が当地を訪れ2~3週間滞在したこと、そしてその年の内に遠征隊の持ち帰った生きた植物のために議事堂の敷地内に温室が造営されたように、彼女の自宅にも温室が増築されたこと等から、遠征隊が持ち帰った植物の一部を、押し花であれ生きたままであれ、父親が手に入れたと推測した。

さらに、遠征隊の隊員で実際に植物採集をした一人サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ(Samuel Wells Williams)は遠征隊に参加した時、アメリカンボード(The American Board of Commissioners for Foreign Missions)から派遣されて既にマカオにいた宣教師であったこと、日本遠征を推進していたウェブスターがアメリカンボードの名誉会員であったこと、また1850年に宗教告白したエドワード・ディキンソンが1852年にはその会員となり、すぐに名誉会員になったこと、さらにはエミリ自身も含めたディキンソン家の人々、11人全員が1855年前後にアメリカンボードに入会し、しかもその後、多額の会費を払って全員が名誉会員になったことも判明した。詩人自身が知らされていたかどうかはわからないが、少なくともこのことでエドワード・ディキンソンのアメリカンボードでの地位が高まったことは確かであり、彼が政治家やアメリカンボード等、様々な関係を使って、植物や園芸に熱心な娘のために日本遠征から持ち帰った珍しい植物を手に入れ、その年の内に自宅に温室を増築したと推測した。

一方、日本遠征隊の持ち帰った生きた植物はその年の内に政府によって造営された温室に植えられたが、乾燥させた標本の方はハーバード大学のエイザ・グレイ(Asa Gray)教授に送られ、比定された後、国務省に送り返されることになっていた。しかし調査の結果、その標本の多くがハーバード大学植物標本館(Harvard University Herbarium)(HUH)に今も保存されていることがわかった。さらにディキンソンの標本帳と共通にある15種の植物の内、2種以外は全てHUHで確認でき、しかもその内の幾つかは日本遠征隊経由でなければ、19世紀半ばに彼女が手に入れられるはずがないことが判明し、日本遠征隊が採取した植物の一部を彼女が手に入れたという可能性が限りなく高いことを証明した。

今回は、何故ペリーが日本遠征隊員に植物採取を命じたのか、また宣教師であったウィリアムズがペリーの通訳でありながら、何故日本遠征中に熱心に植物採取や分類を手伝ったのかという疑問から、調査し判明したことを報告する。

サミュエル・エリオット・モリソン(Samuel Elliot Morison)によれば、ペリーは日本遠征に際し、日本に関する包括的な『遠征記』を作成しようと考え、ナポレオン艦隊が『エジプト

誌』を出版したのに倣って、民間人の科学者を同行させるための予算を要求したが、海軍省は日本遠征を外交使節とみなしていたため認めなかった (Morison xvi)。即ち、ペリーの日本遠征の場合、捕鯨業者や貿易業者の圧力による日本の開国を目的とし、科学調査が目的ではなかったため、その要求は聞き入れられなかったのである。同時期に、新しい植物の種と海藻の新たな分類法を見つけるという結果となった、科学調査が目的の米国北太平洋探検隊 (U. S. North Pacific Exploring Expedition) (1853-1856) が送り出されていたので、なおさら無理であったと思われる。

北太平洋探検隊の方は、植物学者のチャールズ・ライト (Charles Wright) とその助手のジェイムズ・スモール (James Small) が派遣され、彼らの収集した植物はハーバード大学のグレイ教授に送ることとされ、遠征の出発前にはグレイが彼らに収集に必要な備品を供給した (National Museum of Natural History)。そして1854年3月にペリーによって日本が開国されると、すぐさま北太平洋探検隊も日本に立ち寄って、標本採集が行われた。彼らの採取した植物標本は今も HUH に保管され、そのリストも公開されている。しかしペリーの日本遠征隊の標本は HUH に保管されていることは分かったが、リストは未完成である。

このように、ペリーの日本遠征隊には植物等の収集のための人員や予算は用意されなかった。それでも彼は、遠征中に出会う植物や動物等、遠征の記録を画像にして残すため、ドイツ系アメリカ人画家のウィルヘルム・ハイネ (Wilhelm Heine) とダゲレオタイプ写真撮影者のエリファレット・ブラウン・ジュニア (Eliphalet Brown Jr.) を助手として採用し、他の隊員にも標本の採取を手伝わせた (Morison xvii)。しかし幸い、ペリーが乗った米国艦船ミシシッピ号が1852年11月24日に出発した後、1853年3月、国務省のエドワード・エヴァレット (Edward Everett) によって、本人の希望もあって、ジェイムズ・モロウ (James Morrow) が農業学者として日本遠征隊に加えられた。彼は国務省から「極東地域に、特に日本に、合衆国の種子、植物の他、科学の知識を届け」(Cole vii)¹⁾、また遠征中には、アメリカの博物館を充実させるため、合衆国内の農業を改良するため、ひいては西洋の為に、東洋の知識や事物を収集することを依頼された (Cole x)²⁾。また植物を生きたものであれ、標本にしたものであれ、米国に持ち帰ること、またそれらの栽培の仕方や観察したことを記録すること等を依頼された。彼は両親への手紙にこう書いている：

...I received letters of instruction before leaving Washington from the Secretary of State the Hon'ble Mr. Everett which letters give me a great deal of important & interesting work to perform requiring me to distribute seed grown in our own country & foreign countries, to every country that will receive them when offered, & to get in return from them such seed as I can, to send home & bring home should Providence spare my life to be tried in this country. Also to collect plants to bring home & send home & dried specimens & description of plants & their mode of cultivating them. & to make all the observations I may be able to make & the report of them & all my proceedings in a Journal kept for the purpose.... (xvii)

この様なエヴァレットの命令通り、モロウはペリーに会う前に、既に広東と上海で当地の種子や農業の用具を買い求め、合衆国に送っている (221-26)。

ペリーの最初の日本訪問の後の1853年8月25日に、モロウはマカオで初めてペリーに面会した。その時ペリーは、彼が医学博士号をペンシルバニア大学で取得していることを知り、彼を外科医の助手に昇進させたので (Cole 26-27)、彼の遠征中の主な仕事は農業学者として植物の世話をすることと日誌を付けることなどの他に、2ヶ月半ではあったが、外科医の助手として、病気の船員を診察することになった (xviii)。モロウはその日の日記に、それまでの Master's Mate の地位は彼が果たすべき役割にふさわしくないということで、外科医の助手という農業学者に見合った地位に昇格してもらったと書いている (26-27)。ペリーは植物標本を採取し分類できる専門家が来たことを喜んで、外科医の助手と言う方便を使って、彼の待遇を良くしたのではないかと思われる。

19世紀の中頃、生きた植物を運ぶためウォーディアン・ケース³⁾という箱が使い始められていた。モロウは単に「箱」(box) という言葉を使っているが、同様のケースを使ったようである。彼の日記には、1853年2月26日にヴァンダリア号でワシントンを出発した直後の3月3日に、東インド諸島の人々に与えるための大きな「箱」に入った植物を受けとったこと、野菜の種子と船上での植物の世話についての指示とを受け取ったこと、さらにはその箱が中国から植物を運ぶために既に使われた古い物で、ガラスの代わりに細工をした牡蠣の殻で覆われていて、蓋はないこと等が記されている (Cole 5-6)。日本滞在中の日記 (1854年3月21日) には次のような記述がある：

We [Dr. Williams and I] found on the hillsides several new flowers and some plants that would be very interesting to take to the United States—among them the native Camilia (sic) Japonica, two new rasacea (sic), (raspberry), and a very pretty little vine. I dug them up carefully to set out in boxes to try and take them home, but I feared very much that ship life would not agree with them, from my previous experience. (141) (Underlines Mine)

ここで言う「過去の経験」とは、東洋への航路の途中の1853年8月22日の日記に、船に積んだ「植物の4分の3以上が枯れてしまった——根腐れをしていて、健康な状態のものは一つもない。塩水の影響と、海上で塩を含んだ風にさらされていることが原因ではないかと思われる」(26) と書かれているので、その経験を指していると思われる。このように、彼は植物を生きたまま持ち帰る苦勞をしたわけであるが、「モロウ資料」(239-70) の中に、「広東とマカオから持ち帰った12箱の中国の植物」(251-53) というリストはあるが、ここに書かれている「注意深く掘り起こして、箱に入れた」日本の花のリストは無いので、日本の植物は熱帯地方の航海に耐えられなかったようである。

日本の開国に成功し、幕府と1854年3月31日に日米和親条約を結んだ後、遠征隊は約3ヶ月間、日本の沿岸を回り、函館、下田等で標本採集を行った。そして6月25日に日本を発ち、中国などを經由しての帰途に就いた。中国人の助手と17箱の生きた植物と共にモロウが乗船した海軍輸送船レキシントン号はペリー提督より1ヶ月遅れで帰国し、1855年2月16日、ブルックリンの海軍造船所に停泊した。報告によれば、「ケースに入れられた生きた植物の多くが香港からの航海に耐え」、「モロウ博士が持ち帰った、生きている植物と乾燥させた植物の全てを合わせると、その数は1500から2000種類になる」(Cole xx)。そして彼が集めた植物や鉱物は国

務省を通じて特許局に預けられた (265)。

1855年2月、エドワード・ディキンソンも議員として出席していた第33回議会において、東洋から無事に合衆国に生きてそのまま届いた植物の為に温室を造営するため、1,500ドルの予算が可決された (*The Congressional Globe: the Official Proceedings of the 33rd Congress*) (Courtesy, National Archives of the United States) (Uno “Seclusion” 142)。そして乾燥させた標本の内、シダ類、コケ類、藻類等はそれぞれの専門家に送られ、その他の大部分の植物はグレイに送られることになった (Cole xx-xxi)。1855年3月3日、特許局からモロウに、一旦、そこに保管されていた植物標本をグレイ教授に送るようという命令が出された。それには、政府からの礼金は無いが、その標本を吟味し分類することを要望する旨を伝えるようにと書かれ、しかも、この為の予算は無いという条件を必ず伝えるように、という添え書きがあった (260)。こうして標本はグレイに送られたが、命令書には分類後、標本を特許局に送り返すように書かれていたにも拘わらず、前述のように、今も HUH に保管されている⁴⁾。

では、ペリーは予算がないにもかかわらず、そうまでして何故、遠征中に隊員に植物などの標本を収集させようとしたのか？マシュー・カルブレイス・ペリー (Matthew Calbraith Perry) は1794年、ロードアイランドのニューポートの海軍関係者を輩出した家系に生まれた。幾つもの海戦を耳にして育った彼は幼い頃から海軍士官を志望し、1809年、まだ10代の半ばで見習い兵として海軍に入隊した (Griffis 10-17)。そのため学校教育は中等教育で終わっているが、知識欲が旺盛で様々な分野の知識を身に付け、しかも幾つもの外国語を学び、古典にも興味があった。そして科学の分野、中でも貝類学や植物学にアマチュアながら深い知識を求め、貝殻や植物の標本を収集した (Schroeder 69)⁵⁾。また彼は海軍において1833年に創設された合衆国海軍ライシームの組織作りや活動の推進力として活躍し、その執行委員や機関雑誌の編集委員などを務め、会長にも就任した (70)。機関雑誌 *Naval Magazine* には海軍や旅行関係の評論文だけでなく、天文学、地質学、大洋の海流等、科学分野についての記事が掲載された。また創作作品や、海軍関係者の結婚、死亡、昇進等、様々な情報も掲載されたが、ペリー自身は匿名で記事を書いていた (71)。

ライシームとは、一般市民を対象にした講演会等の文化活動やその団体であるが、19世紀初めにジョサイア・ホルブルック (Josiah Holbrook) によって始められた。彼は1788年、コネチカット州ダービーの裕福な農家に生まれ、イェール大学でベンジャミン・シリマン (Benjamin Silliman) の指導のもと、化学と鉱物学に興味を抱いた。1810年、大学を卒業すると、化学を農業に応用することを教える学校を開設し、またニューイングランド地方各地で地質学について講演した。1826年には教育雑誌の中でライシームを組織することを提唱し、マサチューセッツ州ミルベリーで最初のライシームを組織すると、すぐに近隣に次々と組織が生まれ、翌年にはウースターに最初の全国的な組織が誕生した (“Josiah Holbrook Facts”)。ペリーが1833年に海軍で作ったものも当時数多く作られたライシームの一つと言える。

ペリーはまた、海外に遠征する度、子供たちに、鳥、猿等、珍しいお土産を持ち帰ったものであったが、特に貝などを大量に収集し、珍しい種や特徴的な種の標本をニューポート等の博物館に寄贈した (Griffis 401)。このように、彼自身が貝や植物の収集家であり、またライシー

アムという一般市民の啓蒙活動の推進者であったことから、日本遠征は彼にとって、珍しい東洋の標本を採集し、東洋についての知識を深める絶好のチャンスであり、その『遠征記』を出版することによって、それを人々に知らしめ、日本遠征の意義を高めることができると確信していたのではないだろうか。

果たして、ペリーは遠征から帰国すると、全3巻の『遠征記』 *Narrative of the Expedition of an American Squadron to China Seas and Japan, in the year of 1852, 1853 and 1854* (Hawks 編)⁶⁾ を出版した。一方、モロウは中国・日本の生きた植物の写生と自分の日誌を、 그레이の植物標本についての報告と共に別巻として出版するよう国務省に働きかけ、ペリーには資料を提出しなかった。しかし国務省は彼の要望を拒否したので、モロウの生きた植物の写生画は日の目を見ることなく (Morison xvii)、ペリーの『遠征記』の第二巻には 그레이が提出した乾燥させた植物標本についての報告だけが掲載されることとなった (305-36)⁷⁾。ディキンソン家にはこの『遠征記』が保管されていたので、エミリ・ディキンソンも興味深く読んだに違いない。

次に、宣教師のサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズが日本遠征中にモロウと共に熱心に植物採取し分類した理由について検討する。息子のフレデリック (Frederick Wells Williams) によれば、サミュエル・ウィリアムズは、1637年に英国のノーウィッチからボストン郊外のロクスベリに移り住んだロバート・ウィリアムズ (Robert Williams) の末裔であり、その家系には数多くの牧師が輩出している (1)。彼はニューヨーク州ユーティカに、ウィリアム・ウィリアムズ (William Williams) と妻ソフィア (Sophia) の14人の子供の長男として生まれた (11)。ウィリアムは牧師補佐であったトマス・ウィリアムズ (Thomas Williams) の四男で、ニューヨーク州中部の印刷業のパイオニアとして知られているウィリアム・マクリーン (William McLean) の徒弟となったが、1800年頃、アザヘル・シュワード (Asahel Seward) の印刷所に入り、後に Seward & Williams という印刷所の共同経営者となった。彼らの会社では、ディキンソンも読んだはずのノア・ウェブスター (Noah Webster) の *Spelling Book* の他、アイザック・ワッツ (Issac Watts) の讚美歌集 *Divine Songs*、フィリップ・ドッドリッジ (Philip Doddridge) の *Principles of Christian Religion*、それに新約聖書など、宗教的な書物や、学校の教科書などを扱っていた (3)。彼の家は徒弟の若者たちの家でもあり、彼らに与えた彼の宗教的影響は大きく、後に牧師になった者、北アメリカ先住民の宣教師になった者もいる。彼自身も妻に勧められて、後に日曜学校の教師になっている (*Life* 6-7)。

ソフィアも敬虔な清教徒の家系の出で、彼女の父親サミュエル・ウェルズ (Samuel Wells) は植民地時代にニューハートフォードに移り住んだ人々の子孫であるが、彼女が12歳の時、亡くなったため、彼女は敬虔な宗教心と共に、6人兄弟姉妹の一番目として勤勉や節制を身に着けた (*Life* 7-8)。彼女は宣教の大義を重んじ、そのことが多くの人々に影響を与えた。特に、オネイダ郡出身の最初の宣教師であるジェームズ・ギャリット (James Garritt) の改宗は彼女の教育によるもので、彼の宣教師としての出発に際しては彼女が一切の支度をした (*Life* 10-11)。また最晩年には教会の献金箱に「二人の息子を捧げます」と書いた紙を入れた。果たして、彼女の死後、息子ローリングは先住民チョクトー族の宣教師となり、もう一人の息子サ

ミュエルは宣教師として中国へ派遣されることとなった (*Life* 11)。

サミュエルは科学や博物学が好きで、高校を卒業すると、ニューヨーク州トロイにあったレンセラー専門学校に進学し、そこで植物学と鉱物学が専門のエイモス・T・イートン (Amos T. Eaton) から自然の中で標本を採取・分類することの楽しみを覚えた (*Far East* 1 140)。イートンは1776年、ニューヨーク州のニュー・コンコード (現在のチャタム) に生まれた。ウィリアムズ大学を卒業後、ライシーアムを始めたホルブルック同様、イェール大学でベンジャミン・シリマンについて自然科学を一年間学んだ後、ウィリアムズ大学で教壇に立ち、1817年には *A Botanical Dictionary* と *Manual of Botany for the Northern States* を出版した。そして1824年、ステイーヴン・ヴァン・レンセラー (Stephen Van Rensselaer) の援助の元、レンセラー専門学校 (後の工科大学) を創設した (Rudolph, "History" 663)。また1818年から1830年まで、シリマンが発刊した *American Journal of Science* に多数の論文を発表し、その数多くの功績と影響力は1820年代が「イートンの時代」と呼ばれたほどであった (Herbert 63)。

イートンはまた独自の自然科学に関する教育理論及び教育方法を開発した。その肝心な点は生徒を指導する立場に置くということであった。そうすれば、生徒は自分が講義する科学の基礎知識を必然的に身に付け、実験をして見せる経験から農業や工業のために基礎知識を応用することを直に知ることができるというものであった。この教授法は、一言で言えば、実践することから学ぶというもので、それまでの暗記による機械的学習と対照的なものであった (Rudolph, "History" 663)。こうして生徒たちは実習で先生の立場に立っただけでなく、実際に科学の先生となって巣立っていった。このように、イートンは科学の教授法を確立したばかりではなく、数多くの科学の教師を養成した。また長年、ニューイングランド西部地方とニューヨーク州の各地で大学関係者や一般の人々向けに講演を行ったので (Green 37)、この教授法が広く実践されることとなった。詩人の祖父、サミュエル・ファウラー・ディキンソンは子供達にイートンの講演を聞きに行くようにと勧めたそうである (Habegger 9)。

その教授法の中に、標本採取のためのフィールド・ワークが実習の一環として取り入れられていたが、それが科学のあらゆる分野の研究に浸透していった (Rudolph, "History" 663)。ハーバード大学のエイザ・グレイは「生物学の学生全員にエイモス・イートンの確立した方法に従って、実習することを要求した」(664)。アマスト大学第三代学長になったエドワード・ヒッチコック (Edward Hitchcock) は1817年にイートンがアマストで講演した時に初めて出会った (Green 37)。ヒッチコックは化石を収集し地質学者として名声を博したが、植物も採集して、*A Catalogue of Plants Growing without Cultivation in the Vicinity of Amherst College* (1829) を出版している。また *Reminiscences of Amherst College* の中で、イートンこそがコネチカット丘陵地方に、特に鉱物学、植物学等、科学への大きな関心を持ち込んだ立役者だと評している (286)。

イートンは女性教育者も大いに励ました (Rudolph, "History" 663)。例えば、生徒の一人アルミラ・フェルプス (Almira Hart Lincoln Phelps) はディキンソンがアマスト・アカデミー在学中、使われていた「特に女子学生向けの」植物学の教科書 *Familiar Lectures on Botany* (1829) を出版した (Rudolph, "Phelps" 1161)。またディキンソンが1847年から1848年にかけて学んだマウント・ホリヨウク女学院を創立したメアリ・ライオン (Mary Mason Lyon) は、ヒッチコック

クの下で学んでいたが、1824年アマスト大学でイートンの講演を聞き、化学を教える際の困難について質問したところ、彼がトロイに来るようにと助けの手を差し伸べた。そこで1825年、彼女は冬や夏の休暇の期間にイートン家に滞在し、彼の学校で化学や物理学の講義を受けた (Green 37-38)。

それ故、エミリ・ディキンソンも、フェルプスの教科書を通して、アマスト大学のヒッチコックの講義や著作物を通して、マウント・ホリヨウク女学院の校長ライオンを通して、間接的にイートンから影響を受けたと言える。アマスト・アカデミーの案内状に、アマスト大学でのイートン教授等の講演も聞くことができると、書かれていたところを見ると (Tuckerman 87)、彼は何度もアマスト大学で講演をしたようで、アマスト・アカデミーやマウント・ホリヨウク女学院の無名の教員達も彼から影響を受けていた可能性が高く、詩人自身も彼の講演を聞いた可能性がある。どちらの学校でもイートンの教科書は使われていなかったが、彼女は植物標本を特定する際、ほとんどの場合、彼の *Manual of Botany* を、しかもその複数の版を使っていたので (Angelo 169)、直接的にも影響を受けていたと言える。また、前述のペリーの植物や貝類の標本採取も、間接的ではあるが、イートンの科学教育の影響だと言えるであろう。さらには、「日本の花」(2-2) (鶴野 106-17) で論じたように、ウィリアム・クラーク (William Clark) もウィリントン・セミナリー在学中から鉱物と植物採集を熱心に行い、ドイツに留学中も、また帰国後アマスト大学で化学及び農芸科学の教授に就任してからも、植物学の授業も担当し、札幌農学校時代にも植物標本を作成していた。また、アマスト大学で教えていた時期、週末に植物採集をする一般人向けの植物学講座も引き受けた (Searcy 9)。それ故、彼はイートンの科学教育だけでなく、ホルブルックのライシーアムにも影響を受けていたと言える。

さて、サミュエル・ウィリアムズはこのようにニューイングランド地方等における科学教育に大きな影響を及ぼしたイートンの最良の学生の一人で、彼の影響で標本採集が生涯の楽しみとなった。彼は20歳でレンセラー専門学校を卒業する際、教授の職に就くようにと囑望されていた (*Far East* 1, 140)。また彼自身、植物学者の道を歩まんと決心していた。それにも拘わらず、父親の示唆に従って宣教の道を選ぶこととなった。彼の父親はアメリカンボードより、中国広東に設立されたばかりの伝道施設で印刷を任すことのできる若者を紹介するようにと要請され、息子を推薦した (Williams, *Life* 38-39)。それに対してサミュエルは即座に応じたのであるが、これには先にも述べたように、宣教活動に深い関心を抱いていた母親の影響もあったと推察できる。サミュエルは1833年6月に広東の宣教印刷所長となるべく旅立った。そして広東では中国語での印刷が中国政府によって許可されないがため、1835年にマカオに移り、東インド会社が解散したため⁸⁾印刷が未完成となっていたメドハースト (Walter Henry Medhurst)⁹⁾の辞書の印刷を完成させることとなった (*Far East* 1 140)。

1836年、マカオでウィリアムズは、カール・ギュツラフ (Karl Gützlaff)¹⁰⁾ による聖書の日本語訳を手伝っていた3人の日本人に出会った。彼らはその2年前に船が漂流し、アメリカ西海岸に漂着した宝順丸の乗組員であった。彼らは1年以上の漂流の末、コロンビア川地区のフラッター岬に漂着したのであるが、原住民に捕らえられた後、イギリス国籍のハドソン湾会社によって保護された。そしてその会社のジョン・マクラクリン (John McLoughlin) という

男が、3人を利用して日本を開国させようと考えて、彼らを一旦、ロンドンに送った。しかしイギリス政府がこの計画を断ったので、仕方なく、日本に帰る可能性が高いマカオに3人を送ったのであった(丸山 23-51)。

翌年3月、同じく難破し、フィリピンの原住民の囚われの身となり、転売されてマニラにたどり着き、スペイン人に助けられた4人の日本人がマカオのギュツラフの所にやって来た。そして同年7月に、アメリカのオリファント商会の商船モリソン号がその合計7人の日本人を日本に送り届けることとなった(丸山 50-51)。その時の乗船者の中に、オリファント商会の共同経営者チャールズ・キング(Charles W. King)とその妻、イエール大学医学部とイエール神学校を卒業した医療宣教師であるピーター・パーカー(Peter Parker)、通訳としてギュツラフ、そしてウィリアムズがいた。モリソン号の目的は7人の日本人漂流船員を送還して日本との貿易を求めることだった(Shavit 354)と言われているが、このような乗船者を見れば、宣教も目的としていたことは明らかである。さらに、オリファント商会の経営者でモリソン号の所有者であるデイヴィッド・オリファント(David Olyphant)はアメリカンボードの宣教師の渡航費は無料とし、「アメリカの中国への宣教の父」とも呼ばれた人物である(“D. W. C. Olyphant Papers”¹¹⁾)。それ故、丸山は「ギュツラフのプロテスタント宣教師という立場と、オリファント商会のプロテスタントの宗教活動への協力という太いパイプをなくしては、『モリソン号の航海』は実現しなかったと思える」(54)と言う。結局、モリソン号は浦賀沖での大砲による攻撃によって追い返され、その試みは失敗に終わった。

マカオで印刷と翻訳の業務に携わっていたウィリアムズは、1843年5月、タイラー大統領(John Tyler)によって中国への特命全権大使に任命され、中国との通商条約を結ぶためマカオにやって来たカレブ・クッシング(Caleb Cushing)を補佐することとなった。彼はマサチューセッツ州から選出された国会議員でありホイッグ党員であったので、エドワード・ディキンソンもウィリアムズ存在を彼から聞いていたであろう。1844年7月、中国と通商条約締結を果たしたクッシングが8月に帰国した後、彼に同行していたジョン・ピーターズ・ジュニア(John R. Peters, Jr.)が数ヶ月マカオに留まって中国の文物を収集し¹²⁾、それらを米国に持ち帰り、1845年9月から1847年2月までボストンで中国博覧会を開催した(Uno, “Chinese Museum” 43-67)。1846年9月には15歳のエミリー・ディキンソンも見学したが、そのポスター(58)を見ても、それが大掛かりな展覧会で、多くのアメリカ人を驚かせたことは明白である。マカオでそれら豪華な文物を集めるに際して、中国人だけでなくアメリカ人宣教師も手伝ったと言われている。ジョン・ハダッド(John Haddad)は、サミュエル・ウィリアムズの意見だとして、「進歩が不可能」だと思われる人々を高めるために、アメリカ人はお金や時間を使うような福音主義的努力はしないので、博覧会によって中国を好ましい国に見せることは中国人にもアメリカ人宣教師にとっても利益になる。また、もしアメリカ人が中国を高く評価すれば、中国製品がアメリカで売れるようになり、阿片戦争で悪化した中国経済を立て直すことができると、信じたからだと言う(Chapt. 7, 7)。ここで、ウィリアムズの言葉を引用していることから、マカオでピーターズ・ジュニアを手伝った宣教師とは、クッシングを補佐したサミュエル・ウィリアムズに違いない。

ウィリアムズは1844年11月、中国を出立し、米国への帰途についたが、途中インドのボンベイに立ち寄って当地の博物館に、ニューヨーク州中部で収集し中国まで持ってきていた植物や動物の標本、また広東地域で集めた標本を寄贈した (Williams, *Life* 133)。これを見れば、宣教の仕事のため植物学者の道を諦めたにもかかわらず、標本収集の楽しみを忘れたわけではなかったことがわかる。1年近くをかけてヨーロッパ各地を回った後、彼は1845年10月、ニューヨークに着いた。そしてマカオの印刷所で使う中国語のタイプのフォントをベルリンから輸入するための資金集めのため、ユータカやその近辺で、「中国の社会、歴史、制度等についての連続講演会」を開催した。その企画は大成功であった。フレデリック・ウィリアムズはその理由として、サミュエル・ウィリアムズが中国について深く正確な知識を持っていたことと、阿片戦争とその後の開国が知識人たちに中国についての興味を呼び起こしていたことを挙げている (146-47)。しかし同時期にボストンで中国博覧会が始まっていたことも、理由の一つだと考えられる。中国博覧会と彼の中国についての講演が両輪となって、中国への興味に拍車をかけたのではないだろうか。むしろ、そうなることを見越して、ウィリアムズは中国博覧会の時期に合わせて帰国したのではないか。彼は教会、日曜学校、科学関係の協会、教育機関、あるいは私的な集まりなどにも招かれ講演を行ったので、1845年から46年にかけて100回以上、講演会が開かれ、その結果、資金が十分にできた (148)。このように数多くの講演会が開催できたのは中国への関心が高かっただけでなく、ライシウム活動も盛んであったからであろう。

1846年9月の手紙で、ウィリアムズはニューヘブンであったアメリカンボードの会合では、500人近い会員と1000人以上の会員以外の聴衆が集まったと書いている。またシリマン教授の家に招かれ滞在したとも記している (149)。ニューヘブンのシリマン教授とえば、ライシウムの提唱者ホルブルックや、ウィリアムズの師であったイトンを指導したベンジャミン・シリマンに他ならない。しかもエドワード・ヒッチコックもイエール大学神学校に在学中、シリマンの実験室で科学研究の楽しみを覚え、それがきっかけで、1821年に牧師となったにも拘らず、まもなくその職を辞して、シリマンの実験室に戻り科学を学び、1825年アマスト大学の化学と博物学の教授職に就いた (Sewall 34)。それ故、ニューヘブンでのウィリアムズの講演には、ヒッチコックも来ていたであろう。また、1823年にイエール大学を卒業しアマスト大学の財務理事をしていたエドワード・ディキンソンも聴衆の一人であった可能性がある。彼はヒッチコックを通じて、ウィリアムズに紹介された可能性もある。たとえ彼がニューヘブンでの講演会に行かなかったとしても、1846年、1847年、マサチューセッツ州議会議員として、クッシングと同じくホイッグ党のメンバーとして、ユータカやその近辺で行われた「100回以上もの講演会」のどれかには出かけていたであろう。そしてウィリアムズと知り合いになっていた可能性が高い。

1849年9月に広東に戻ったウィリアムズはその印刷所とそれまでブリッジマン (E. C. Bridgman) と共同で編集していた雑誌 *Chinese Repository* を全て一人で担当することとなった。その雑誌に掲載された中国の地理と花についての記事はほとんど彼の書いたものである (*Far East* 1, 141) ことから、植物学を忘れたわけではないことがわかる。1853年、彼はペリーか

ら日本遠征隊の通訳になるようにとの要請を受けた。その際、彼はどのように自分が本国から推薦を受けることになったのかと不思議に思った。彼の日記によれば、広東でのペリーとの初めての面談で、母国語の読み書きもできない無学な日本人船員と話ができる程度の日本語しか知らないこと、しかもそのような不完全な日本語も9年以上も使っていないこと、それ故、あまり自分の日本語能力に期待してもらっては困るが、最善の努力はすることを伝えた (Williams, *Life* 186-87)。その折、ペリーは、ウィリアムズに通訳を務めてもらいたいがため、シーボルト (Philipp Franz Balthasar Von Siebold) を拒否したと言った (186)。ペリーは1820年代に長崎の出島に滞在したドイツ人医師で博物学者のシーボルトの日本についての著作だけでなく、他にも当時の日本についての書物を読んで日本について研究していたので (Schroeder 175)、シーボルトが1828年に日本国外追放処分を受けていたことは知っていたに違いなく、彼を公式通訳にしなかったのは当然のことと思われる。

また丸山は、「ペリーの日本遠征は、アメリカにとってモリソン号のリベンジの意味があった」、アメリカの信仰に対する感情を考慮してモリソン号に乗船していた宣教師であるウィリアムズを通訳に選んだのだと言っている (131)。ペリーはモリソン号の所有者オリファントと同じく、ニューポートに生まれている故、オリファント商会のオリファントとモリソン号事件について詳しく知っていたに違いなく、日本遠征にはモリソン号事件に対する報復の意味があったのは確かであろう。モロウによれば、ウィリアムズに初めて会った時、彼は1837年のモリソン号に乗船していた彼や仲間に対しての日本人の仕打ちに対して、未だ強い怒りを覚えていたということである (Cole xix)。ウィリアムズ自身は何と言っているかということ、久里浜という小さな漁村においてペリー提督と伊豆守および石見守との初めての会談が行われた直後の1853年7月16日、手紙の中で、その会談について次のように語っている。

It was the meeting of the East and West, the circling of the world's intercourse, the beginning of American interference in Asia, the putting the key in the door of Japanese seclusion, the violation of the sanctity of Japanese soil, and, to me alone, a full revenge for the unprovoked firing on the defenseless Morrison, which took place not over half a mile from (sic) this spot, sixteen years before. (*Life* 196)

このように、彼にとって日本遠征に加わることはモリソン号事件に対する報復の意味もあったことは確かである。しかし彼の植物採集を愛する気持ちや、若い頃植物学者になりたかったことを考慮すると、たとえ正式の仕事ではなくても、未知の土地の自然を探索できるのではないかという密かな期待もあって、日本遠征の通訳としての仕事を引き受けたとも考えられる。

実際、彼は自ら進んで日本国土で標本採集をし、船の中でその種別を行った。モロウは1854年1月14日、ベテランの「宣教師であり、編集者であり、言語学者で、博物学者」のウィリアムズ牧師と初めて会ったが、「科学や宗教について共通の興味」を持っていることから親しくなり、互いに助け合うようになったと言う (Cole xviii-xix)。また「ウィリアムズの中国語や日本語の知識がモロウの仕事に大いに役立ち、二人は一緒に武蔵や、伊豆、また大島の美しい自然の中を歩いて、花や、灌木や、苗木を探し」と、日記に書いている (xix)。フレデリック・ウィリアムズも次のように書いている。

Arrived at Port Lloyd¹³⁾, the only settlement on the largest of the Bonin group, parties were sent from both vessels to explore the islands. The occasion found in Mr. Williams so eager an amateur in arranging and classifying the minerals and flora brought on board, that the Commodore exclaimed delightedly: "Why, our interpreter is as good an interpreter of nature as he is of the people of these regions!" The lack of a professional botanist and geologist connected with the expedition lessened its contributions to science in these branches, but Mr. Williams' unabated love of nature supplied every moment which he could spare from his duties with delightful and congenial occupation, and in the end the flagship returned with very creditable collections. (Williams, *Life* 190-91) (Underline Mine)

このようにウィリアムズが標本採取や標本の分類に熱心に取り組んでいるのを目の当たりにしたペリーは、彼を採用した際には予期していなかったことなので驚いて、「何と、我々の通訳者はこのあたりの人々の通訳だけでなく、自然の通訳にも長けている！」と、喜んだのである。

幕府との交渉が終わり、ペリーの艦隊が下田に戻り、そこで1ヶ月滞在した際には、船員たちに上陸の許可が出た。そこで通訳としての仕事がそれまでより楽になったウィリアムズはモロウと共にそのあたり一帯で何度も植物採集と鉱物採集を行った。フレデリックによれば、父親は探検家として喜び勇んで植物標本を集めたが、見知らぬ美しい花を摘む度に、ひょっとしたら未知の種を発見したのではないかと、わくわくしながら採集した (*Life* 217-18)。果たして、後にグレイが遠征隊の集めた標本を比定した際、新たに発見された花の一種に、*Clematis Williamsii* と名付け、『遠征記』の "List of Dried Plants Collected in Japan" のその花の欄に、"The species is named for one of the collectors, S. Wells Williams, Esq. of Canton, a cherished friend and correspondent, author of one of the best works that have appeared upon the Chinese empire, and a good naturalist, as well as a learned oriental scholar" (II 306) と、解説している。標本の報告の冒頭にも、"This collection, hastily made as their small opportunities permitted, by Dr. Morrow and my early friend, Mr. Williams, of the American Mission at Macao, has proved a very interesting one" (II 305) と書かれているように、グレイはウィリアムズのことを早くから知っていたようである¹⁴⁾。彼はウィリアムズの生まれ育ったユーティカに近いソークアイト (Sauquoit) に生まれ、近くのフェアフィールド医学校で博士号を取得した。若い頃から植物や鉱物の採集をし、ミシガン大学やハーバード大学の教授になる前にはユーティカのバートレット高校で化学、鉱物学、植物学を教えていた (Farlow 165) ので、学生の頃から知り合っていたのかもしれない。あるいは、イートンを通じて知り合い、ウィリアムズの講演会のどれかに参加していた可能性もある。

ウィリアムズは日本での標本採集を相当楽しんだようで、彼自身、日本滞在最後の1854年6月22日、日記に次のように記している：

If there is any one thing has rendered the expedition to Japan pleasant to me, it is the walks in search for flowers, and the greater freedom of intercourse with the people.... (*Journal* 218-19)

遠征の終了後、ウィリアムズは米国には帰らず、広東に戻ったため、ペリーは3度も彼に手紙を出し、遠征中の貢献を高く評価し、礼を述べている (*Life* 229-231)。

このように、イエール大学のシリマンの弟子であったエイモス・イトンの実践的な、フィールド・ワークを取り入れた科学教育がグレイやヒッチコック等、優れた科学者に影響を与え、研究を深めた。またフェルプスやライオンのような女性の教育者を含め、多くの科学教育者を輩出し、科学の発展に大きな足跡を残すことになった。そして彼らの教育機関での科学教育と同時に、やはりシリマンの弟子であったジョサイア・ホルブルックが提唱したライシームによる一般人向けの文化啓蒙活動のお陰で、その新たな科学教育やその実践が一般の人々まで広まり、その分野の専門家ではなくても、自然を愛し、植物等の標本を作成し、間接的に科学に貢献する人々が数多く育ったのである。その最良の例がペリー提督やウィリアムズ牧師であり、その二人が日本遠征という機会で見知らぬ人も出会うことになった。その結果、彼らと同様にイトンの影響を受け、自然を愛し、植物標本を作成していた詩人エミリー・ディキンソンの元に、彼らの採取した日本の植物が届いたと言えるのである。

注

*本研究は学術研究助成基金助成金（基礎研究（C）（23520348））の助成を受けた研究成果の一部である。

*本研究の一部は2016年10月1日、ノートルダム清心女子大学で開催された日本アメリカ文学会全国大会で口頭発表した。

- 1) Cole が編集したモロウの日記 *A Scientist with Perry in Japan* には、「日本の天皇に贈与された園芸植物および野菜の種子のリスト（合衆国艦隊の通訳者である S. ウェルズ・ウィリアムズにより翻訳された中国語付き）」が、また「1854年3月13日に、種子やその他の贈り物と共に、合衆国から日本の天皇に贈られた農業器具のリスト」がある（234-38）。
- 2) *A Scientist* の第6部には、中国と日本で手に入れ合衆国に送った農業用器具と種子のリストがある（221-38）。
- 3) ウォーディアン・ケース（Wardian case）とはナサニエル・バグショウ・ウォード（Nathaniel Bagshaw Ward）が1829年頃に発明した、植物を生きのまま運ぶための密閉した保護ケースで、ガラス等でできている（PlantExplorers.com）。
- 4) モリソンによると、グレイ教授によって標本が「比定」された後、「(ちょっとした見苦しい議論のちに)」、(その結果が)「提出されて『遠征記』第二巻の印刷によく間に合った」(xvii) (金井訳 14) ということなので、その際に標本が特許局に戻されないことになったのかもしれない。なお、モロウが東洋で集めた種子は実験に使われたり、農家や園芸家に分配され、道具や家事用具、織物類は特許局管轄の National Gallery や Smithsonian Institution に保管された (Cole xxi)。
- 5) 遠征中のモロウの日記（1854年3月21日）に、提督のために淡水の貝を数個見つけたが、その内の2個はこれまで見たことも無いものだ、とある (Cole 141)。
- 6) ペリーは遠征の帰途、イギリスに滞在中の作家のナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）に『遠征記』の執筆を打診したが、実現しなかったため、ニューヨークのカンタベリー教会の牧師で歴史家のフランシス・ホークス（Francis L. Hawks）に編集を依頼し、1856年に第1巻目が刊行された (Morison xv)。
- 7) 『遠征記』の第2巻には、他に、台湾の石炭産出地についての報告、日本で集められた鳥類についての解説、日本で収集された貝殻についての報告、モロウによる琉球の農業についての報告等、合計43もの章がある。
- 8) 1834年、東インド会社の貿易独占体制が本国政府の政策変更により終わり、マカオでは、東インド会社の業務を引き継ぐためのイギリス政府機関が作られた（丸山 44）。
- 9) メドハーストはロンドン生まれの会衆派の宣教師で、1816年、ロンドン伝道協会からマラッカに送ら

れた。マレー語と中国語を流暢に話せた彼は、マラッカの他、ペナン、バタヴィアなどで活発な宣教活動を行った他、出版活動も行った (*Biographical Dictionary of Chinese Christianity*)。彼は数多くの書物を出版したが、その中に、*An English and Japanese, and Japanese and English vocabulary*, (Batavia, 1830)、*Philo-Sinensis: Translation of a comparative vocabulary of the Chinese, Korean (sic), and Japanese languages* (Batavia, 1835)、*A Chinese and English dictionary* (Batavia, 1842) がある (「メドハースト」) が、ウィリアムズが印刷を完成させたのは、*Philo-Sinensis* と思われる。

- 10) ギュツラフは1803年プロイセン領ポメラニア地方に生まれ、英国でロバート・モリソン (Robert Morrison) と出会い中国に興味を抱き、1824年オランダ伝道協会の宣教師としてシヤムに派遣された。3年間で聖書をタイ語に翻訳し、中国人から福建省の方言を習った。1828年オランダ伝道協会を離れ、1830年代には何度も鎖国中の中国を訪れ、英語で旅行記を出版した。1834年にモリソンが死ぬと、彼はその後釜として東インド会社の通訳および秘書となったが、その会社が解散すると、その業務を引き継いだ政府機関の翻訳官に就任した。マカオで彼はヨハネの福音書と使徒書簡を日本語に翻訳していた (丸山 43-44、*Biographical Dictionary of Chinese Christianity*)。
- 11) David Washington Cincinnatus Olyphant は1789年、ペリーと同じくニューポートに生まれた。祖父はロードアイランド州知事であったが、彼は貿易会社 King and Talbot に入社し、1820年中国に渡り、広東で宣教師ロバート・モリソンに出会った。それが彼の宣教との関係の始まりだと言われている。1828年にオリファント商会を立ち上げたが、彼の商社は中国にアヘンを密輸しなかった当時唯一の会社であった。1834年、1837年には中国に滞在し、1838年アメリカンボードの役員に選ばれた (“D. W. C. Olyphant Papers”)
- 12) ピーターズ・ジュニアは中国人にアメリカの文化を紹介しようとクッシングに提案し、電報やダゲレオタイプ写真機などを中国に持って行ったが、披露する機会はなかった。帰国に際して、今度は中国の文物を持ち帰り、米国で披露しようと考えた (Haddad, Chapt. 7, 1)。
- 13) 小笠原群島 (the Bonin group) の父島を指す。
- 14) 広東に戻った後、1855年9月13日、ウィリアムズは 그레이 に手紙を送っている：

... I had hardly heard anything of you for years, tho' you had evidence in the plants that I had not forgotten you. It was a great pleasure to have the opportunity to ramble over the hills & valleys of Japan as Dr Morrow & I did, and I was happy in having him for a companion, as well as all the Japanese we saw & attracted to our presence.... I am glad to learn that the plants reached you in such order that you can examine them, and learn somewhat of the flora of Shimoda & Hakodadi. I don't know what Dr Morrow may have suggested respecting them, but if it be possible, I should like to have some of them go into the Report which Congress has called for respecting the Japanese Expedition, as that seems to be the most appropriate plan for a [???]. Do you propose to draw up any description of them, or make a memoir on them, or put any drawings in any periodicals? It will be a good opportunity perhaps to get drawings of [???] plantarum made at good expense. (Underlines Mine)

(Courtesy, Harvard University Herbarium and Library)

この中で、自分が採取した植物標本の中に、 그레이 のことを忘れていなかった証拠が見て取れるだろうと書いているところから、二人の関係は植物採取を通してであったことがわかる。また 그레이 が判定できる状態で標本が届いたこと、採取した標本について (그레이 のお陰で) 学ぶことができ嬉しうと言っている。1855年7月23日の手紙では次のように述べている：

It turns out to have been a far richer collection than I supposed it would be, and you have made thoro' work with them, and found out everything there was to be found. I have been trying to remember the looks of the new genes, the Tricercandra, from the description of it, but cannot assure myself whether it is the anomalous looking herb I forced at both ports, & told Morrow that I guessed it would be a new genices if there were one at all. I am much obliged for your compliment to me in the Clematis Williamsi, & shall try to find it again if I ever see Shimoda again. If I had had a choice, however, I would have preferred the Lonicera, as Morrow has there named after him; for I think the honeysuckle would have been more likely to be known, as well as the handrouser plants.... (Courtesy, Harvard University Herbarium and Library)

このように、自分たちが集めた植物標本が思っていたより、はるかに大きな成果であったことを喜び、今回発見された新種の花に自分の名前が付けられたことを感謝すると同時に、もし自分で選べたのなら、鉄線 (*Clematis Williamsi*) より、モロウの名が付けられたスイカズラ (*Lonicera Morrowi*) の方を選んだのに、と書いている。

参考文献

- Angelo, Ray. "Catalog of Plant Specimens." *Emily Dickinson's Herbarium: A Facsimile Edition*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 2006. 169–73. Print.
- Cole, Allan B., ed. *A Scientist with Perry in Japan: The Journal of Dr. James Morrow*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1947. Print.
- "D. W. C. Olyphant Papers." Missionary Research Library, Columbia University. 11 Feb. 2014. Web.
- Eaton, Amos. *Manual of Botany, for North America*. Fifth Edition. Albany: Websters and Skinners, 1829. Print.
- Farlow, W. G. "Memoir of Asa Gray 1810–1888 (Read before the National Academy, April 17, 1889)." PDF file. National Academy of Sciences. Retrieved 18 January 2015.
- Green, Elizabeth Alden. *Mary Lyon and Mount Holyoke: Opening the Gates*. Hanover, New Hampshire: University Press of New England, 1979. Print.
- Griffis, William Elliot. *Matthew Calbraith Perry: A Typical American Naval Officer*. Boston: Cupples and Hurd, 1887. Print.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson*. New York: Random House, 2001. Print.
- Haddad, John Rogers. *The Romance of China: Excursions to China in U. S. Culture: 1776–1876*. 14 Feb. 2007. Web.
- Hawks, Francis L., ed. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan Performed in the Years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy*. 3 vols. Washington: Beverly Tucker, 1856. Print.
- Herbert, Robert L., transcribed & annotated. *The Complete Correspondence of Edward Hitchcock and Benjamin Silliman, 1817–1863*. Amherst College. Web.
- Hitchcock, Edward. *Reminiscences of Amherst College*. Northampton, Mass.: Bridgman & Childs, 1863. Print.
- "Josiah Holbrook Facts." *Encyclopedia of World Biography*. 2010. Web.
- "Karl Friedrich August Gutzlaff." *Biographical Dictionary of Chinese Christianity*. Web.
- Morison, Samuel Eliot. "Introduction." *The Japan Expedition 1852–1854: The Personal Journal of Commodore Matthew Perry*. Ed. Roger Pineau. City of Washington: Smithsonian Institution Press, 1968. xv–xix. Print.
- National Museum of Natural History. "U. S. North Pacific Exploring Expedition (1853–1856)." *Historical Expedition*. Smithsonian Institution, 2016. Web.
- PlantExplorers.com. "Dr. Nathaniel Bagshaw Ward." 2013. Web.
- Rudolph, Emanuel D. "Almira Hart Lincoln Phelps (1793–1884) and the Spread of Botany in nineteenth Century America." *American Journal of Botany* 71. 8 (Sept., 1984): 1161–67. *JSTOR*. Web. 5 April 2016.
- . "History of the Botanical Teaching Laboratory in the United States." *American Journal of Botany* 83. 5 (1996): 661–71. *JSTOR*. Web. 19 March 2016.
- Searcy, Karen B. "The Plant Collections of William S. Clark." 『クラーク博士と札幌の植物』(北海道大学博物館企画展示図録)。札幌：北海道大学博物館、2012。8–13。Print.
- Sewall, Richard. *The Life of Emily Dickinson*. 2 vols. N. Y.: Farrar, Straus and Giroux, 1974. Print.
- Schroeder, John H. *Matthew Calbraith Perry: Antebellum Sailor and Diplomat*. Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2001. Print.
- Shavit, David. *The United States in Asia: A Historical Dictionary*. New York: Greenwood Press, 1990. Print.
- The Congregational Globe: the Official Proceedings of the 33rd Congress*. [Courtesy, National Archives of the United States]

- The Far East* 1 (1876). Shanghai. Print.
- Tuckerman, Frederick. *Amherst Academy: A New England School of the Past 1814-1861*. Amherst, printed for the trustee, 1929. [Courtesy, Google]
- Uno, Hiroko. "Emily Dickinson's Encounter with the East: Chinese Museum in Boston." *The Emily Dickinson Journal* (The Emily Dickinson International Society) 17.1 (2008): 43-67. Print.
- . "Emily Dickinson's Seclusion and Japan." *Kobe College Studies*. 58.2 (2011): 129-150.
- "Walter Henry Medhurst." *Biographical Dictionary of Chinese Christianity*. 2014. Web.
- Williams, Frederick Wells, ed. *The Life and Letters of Samuel Wells Williams, LL.D.: Missionary, Diplomatist, Sinologue*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1889. [Courtesy, Google]
- Williams, Samuel Wells. *A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853-1854)*. Ed. F. W. Williams. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 37.2. Yokohama: Kelly & Walsh, 1910. Print.
- 「ウォルター・ヘンリー・メドハースト」。*Wikipedia*. 15 July 2016. Web.
- 鶴野ひろ子。「エミリー・ディキンソンと日本の花 (2-1)」。*『神戸女学院大学論集』* 61.1 (2014年6月): 155-67. Print.
- 。「エミリー・ディキンソンと日本の花 (2-2)」。*『神戸女学院大学論集』* 61.2 (2014年12月): 195-203. Print.
- 。「エミリー・ディキンソンと日本の花 (2-3)」。*『神戸女学院大学論集』* 62.2 (2015年12月): 211-28. Print.
- 丸山健夫。『ペリーとヘボンと横浜開港』。京都：臨川書店、2009年。Print.
- モリソン、サミュエル・エリオット。「序説」、『ペリー日本遠征日記』。金井圓 訳。新異国叢書第Ⅱ輯1。東京：雄松堂、1985。Print.

(原稿受理日 2016年9月19日)